

聖書：使徒5：12～32

説教題：人に従うより、神に従うべき

日時：2013年7月21日

前回、アナニヤとサツピラの事件を通して、教会全体に非常な恐れが生じました。土地を売った代金全部を献金したわけではなかったのに、これが全部です！と偽ったアナニヤ夫妻は、厳しいさばきを受けました。しかしこの結果、教会はしぼんでしまいました。むしろ教会は正しく整えられ、祝福されて行った様子が今日の箇所に記載されています。前回、ヨシュア記におけるアカンの罪との類似性に触れましたが、あの時もアカンの罪が正しく取り扱われたことを経て、イスラエルは主の祝福を取り戻して行きました。同じように今日の箇所でも、罪の正しい解決が主のより勝る祝福を回復することへつながっています。12節：「また、使徒たちの手によって、多くのしるしと不思議なわざが人々の間で行なわれた。」使徒たちのメッセージが神からのものであることを実証するものとして、まだ聖書が完結していなかった当時、このような奇跡が行なわれました。そして教会員はみな心を一つにして、ソロモンの廊と呼ばれるところに集まっていました。

そんな教会を取り巻く外部の人たちはどうだったのでしょうか。13節に「ほかの人々は、ひとりもこの交わりに加わろうとしなかったが、その人々は彼らを尊敬していた。」とあります。人々はアナニヤとサツピラの事件を知っていたからでしょう。この教会の交わりに加わることに恐れを感じていました。生半可な気持ちでは入れない、そんなことをしたら自分の身にも危険が及ぶ、と思っていたのです。その一方、14節には「主を信じる者は男も女もますますふえていった。」とあります。一見矛盾したことが言われているようですが、教会にはこの両面が必要ということでしょう。教会は何でもありのところではありません。聖なる神の御住まいとして、一種の近寄りがたさがあります。しかし同時に人々は入りたいという気持ちも抑えることができないでいました。そして信仰に入る人たちが多く起こされてきました。ここに教会の理想的なバランスが示されているでしょう。

15～16節には神のみわざが特別豊かに現れていたことが記されています。人々は病人を大通りへ運び出し、寝台や寝床の上に寝かせ、ペテロが通りかかる時にはせめてその影でもだれかにかかるようにするほどになりました。それほど多くの人々がペテロたちのそばにひしめいていたのです。かつて多くの群衆が押し寄せたイエス様の姿を彷彿とさせるような状況です。さらに16節では、エルサレムばかりか、付近の町々から大勢の人々が来たと記されています。そして何とその全部がいやされました。これは神の恵みの豊かな現れです。キリスト教はもちろん単なる現世ご利益主義とは違います。その中心メッセージは罪からの救いです。しかし罪からの救いは、心だけではなく、肉体も含めたその人の存在すべてに祝福をもたらします。やがての天国には死もなければ病もありません。そのことを指し示すみわざがこのようになされていたのです。

しかし、でした。このようにして教会の歩みが祝福されて行く中で、またしてもこれを妨害しようとする動きが現れます。今回、教会の前に立ちはだかったのは、またしても大祭司やサ

ドカイ派の人たちでした。今回は大祭司とその仲間たち全部とありますから、前回よりも強力です。彼らは「妬みに燃えて立ち上がった」とあります。彼らはペテロをはじめとする使徒たちが成功しているのを見て面白くなく思ったのでしょうか。そして何と言っても、使徒たちが教えている内容が我慢ならない。あのイエス・キリストのことなんか宣べ伝えてもらいたくない。あの人のことはみなに教え広めないでもらいたい。なのに、その声に聞く人がどんどん増え広がっている。そこで彼らは使徒たちを捕らえてしまいます。イエス様はかつて弟子たちに「人々はあなたがたを捕らえて迫害し、会堂や牢に引き渡し、わたしの名のために、あなたがたを王たちや総督たちの前に引き出すでしょう。」と言われましたが、4章に引き続いて、再びこのことが彼らの上に臨んだのです。しかも今回はさらなる力をもって、です。この時点で考えれば、教会は大変なピンチに追い込まれたのです。

しかし私たちが今日の箇所に見るのは、神はご自身に従う教会を放置されないということです。19節を見ると、何と夜に御使いが現れて、牢の戸を開き、彼らを外に連れ出してくれました。とても不思議なことは、獄舎の前で番人たちがしっかり立って見張っていたことです。またその獄舎は朝にチェックしたところ、完全に閉まっていたことです。なのに、御使いは使徒たちを外に連れ出すことができた。どのようにしてそのことができたのか、私たちには分かりません。このことは神は私たち人間の頭では考えられないような方法で、ご自身に従う者を守り、助けてくださるということでしょう。御使いは20節で「行って宮の中に立ち、人々にこのいのちの事ばを、ことごとく語りなさい。」と言います。御使いは使徒たちが自分たちの使命に一層励むために救出したのです。宮で語っていたところを捕らえられて、留置場に入れられたのに、また宮の中で語ったら、また捕まえられて、何もいいことがないのではないかと私たちは思うかもしれませんが、彼らはこの使命に邁進します。21節にありますように、夜明けごろに宮に入行って、教え始めます。

さて、このことを知らずに、翌朝になって使徒たちがいないことを発見したサンヘドリンのメンバーたちは大慌てとなります。一体これはどういうことなのか。24節を見ると「一体これはどうなっていくのか」と彼ら自身、不安と恐れさえ抱いたことが記されています。そんな中、「大変です！」と一報が入ります。「あなたがたが牢に入れた人たちが、宮の中に立って、人々を教えています。」とある人が告げます。それを聞いて宮の守衛長と役人たちが急いで出て行き、使徒たちを連れて来ます。とてもユーモラスな展開ですが、当の本人たちにとっては益々怒りが収まらない状態だったでしょう。

さて使徒たちにとってみれば、これは一層のピンチと言うべき状況だったのではないのでしょうか。しかしイエス様はかつてこう言われました。「それはあなたがたのあかしをする機会になります」と。サンヘドリンのメンバーがいよいよ苦々しい顔つきで、「あの名によって教えてはならないとあれだけ厳しく命じておいたのに、何ということだ！我々はあなたがたがに語るな！と言っただろう。」と詰問したのに対し、使徒たちは自分たちの行動原理をはっきりと証しします。29節：「ペテロをはじめ使徒たちは答えて言った。『人に従うより、神に従うべきです。』」彼らは前に4章19節でもこう言いました。「神に聞き従うより、あなたがたに聞き従うほうが、神の前に正しいかどうか、判断してください。」

私たちはもちろん立てられている人々に従うべきです。ローマ書 13 章 1 節や I ペテロ 2 章 13 節にありますように、存在している権威はすべて神によって立てられたものであり、私たちはその神への信仰のゆえに、上に立つ権威に従うようにとされています。信仰をもっていない王や総督や主人であってもそうです。しかしその人たちの権威は無制限ではありません。もしその人が神と矛盾することを私たちに命じるなら、私たちは当然、神に従う道を選び取らなければなりません。私たちは神に逆らってまで、立てられた権威に従うようにとは言われていません。この時の使徒たちは、神からイエス・キリストの福音を宣べ伝える使命を与えられていました。それに対して祭司長たちは「語るな!」と言います。矛盾します。この場合には私たちは彼らのように「人に従うより、神に従うべきです」と告白しなければならないのです。

ここで注目に値することは、彼らはこの時、暴力的な態度を取っていないことです。行ないにおいても、言葉においても、そうです。私たちはしばしば、自分は人にではなく神にこそ従うと主張して、目の前の人間に対して荒々しい態度に出ることを正当化するかもしれませんが、彼らはそうではありませんでした。彼らはこの「抵抗」において、攻撃はしていません。彼らは義のために進んで苦しみを受ける心の用意をもって、十字架の民として、自分たちの信仰を告白しているだけです。

彼らは、自分たちがこのように神に第一に従うべきであることについて、三つのことを 30～32 節で述べています。その一つ目は、神はイエスをよみがえらせたということです。ユダヤ人の指導者たちはイエス様を十字架にかけて殺しましたが、神はイエス様を死からよみがえらせたことによって、人間の判断をひっくり返しました。ですから人の命令ではなく、神の命令に従うべきことは明白です。もしその結果、ユダヤ人当局者に苦しめられ、殺されるようなことがあっても、神はやがて同じように彼らの判決をひっくり返し、使徒たちを高く上げてくださることもこれは意味しているでしょう。

二つ目は 31 節です。祭司長たちはイエス様を殺し、神はこの方をよみがえらせましたが、神はそのことにおいてイスラエルに救いを備えてくださいました。神はこのイエスを君とし、また救い主として、ご自分の右に上げ、悔い改めと罪の赦しを提供しておられます。どんな人でも、このイエス・キリストにあつて悔い改めて罪赦され、救われることができます。この素晴らしい知らせについてどうして黙っていることなどできるのでしょうか。使徒たちはここで祭司長たちにさえ福音を語っています。

そして三つ目は 32 節にあるように、神は聖霊を遣わして、イエス・キリストを証言する彼らの歩みを支えてくださっているということです。使徒たちはイエス・キリストの証人としての歩みをしていますが、この背後で彼らの働きを力強く支えているのは聖霊であるということです。もともとおどおどすることしか知らなかった使徒たちが、このように力強く主イエスのことを証しできるのは、聖霊が助けていてくださるからです。神はこのようにご自身に従う者たちに必要な助けを与え、豊かに支えて下さるのです。

イエス・キリストを信じて従う歩みには、常に反対勢力による妨害活動があります。ペンテコステの聖霊の注ぎを受けた直後の教会もそうだったのですから、今日の私たちの生活にも同じような困難や逆境が生じて驚くべきではありません。しかし今日の御言葉を通して私たち

が問われていることは、そういう中で私たちはどの道を選び取るのか、ということです。今日の御言葉が示しているのは 29 節の言葉でしょう。私たちの周りには色々な人たちが、信仰を貫いて生きようとする私たちに反対するかもしれません。上に立つ人がプレッシャーや脅しをかけて来るかもしれません。その人たちの言う通りにしないと、この世でうまく生きていけないように思われるかもしれません。その中で私たちは使徒たちがなしたこの告白、「人に従うより、神に従うべきです」を自分のモットーとして歩みたいのです。神はそのように歩む者を決して見捨てません。神はその人を守るために御使いをも遣わしてください。また神の御心に逆らう人間の判断をひっくり返して、ご自身に従う者を高く上げてくださいます。またご自分に従う者には聖霊を与えて、私たちがもともと持っていなかった力によって生きることができるよう導いてくださいます。私たちはこのような神を信じて、恐れずにこの道を選び取って歩みたいのです。その者を神は守ってください。その神の守りを頂いて、福音を宣べ伝える民としての務めを果たし、神と共に神の国を広げ、そのために用いられる器の歩みへ進みたいのです。